

---

# 俺の転生先は...

Galatea

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の転生先は…

### 【Nコード】

N0288X

### 【作者名】

Galatea

### 【あらすじ】

交通事故で死んだ俺は、神様に会う…なんて事は無かったが、謎の光に導かれ転生した。

主人公は最初から最強です。そうゆうのが苦手な方は読まない方が良いでしょう。

## 1話（前書き）

自己満足で書いているのであまり面白く無いと思いますが、楽しんで頂ければ良いなと思います。

## 1話

「う、うん？此処は…」

俺は体を動かして、周りを見渡そうとすると…

ジャラジャラ

ん？

「何だ、今の音は？」

俺の近くから鳴った様な…

「おいおい何だよ、これ」俺は下を向くと…

「鎖、なのか？」

金色に光る物が、全身に巻き付いていた

何か、頭に文字が…

「最上級魔術、属性は光、効力は絶対の束縛…解除方法は力業、闇の魔法…か」何だか良く分からんけど、取り敢えずこれを解こう

まずは、闇の魔法ってのを使って見るか

「有効なのは…これだな。闇よ、侵食」

頭に浮かんだのを唱えた瞬間、金色に光る物が黒く染まって行った

「よし、後は力業で…ふん！」

ギリッギリギリ

「くっ…」

ピシッピシッ

「あと、少、しっ!!」

パリーン

ガラスが割れた様な音が鳴り、金色に光る物が粉々になり消えて行った

「ふう、やっと解けた」

解けたは良いんだが、頭に文字が流れて来て気持ち悪いな。少し整理しよう

俺は適当な所に座った

数時間後…

「整理するのに、大分時間掛かったな…まっ、正確には俺の正体に殆どの時間を使ったんだがな」

取り敢えず整理すると、この世界はベッツェルって名前で、魔法がある世界。

ベッツェルは地球の2倍近くあり、大陸が3つある。

割合は陸4、海6

人間の他にエルフ、ドワーフ、精霊、獣人、竜、と5つの種族がある。種族の殆どは人間の事が嫌いらしい…そして魔物は全種族の共通の敵

「世界観は大体これ位だろ」

で、本題の俺だが…どうやら魔神として、洞窟の奥に封印されていたらしい。曖昧だが、記憶が断片的な物しか無いからどうしようも

無い

「後は…」

前の世界、地球に居た記憶も断片的な物しか無い。それに…名前が、思い出せないって事、か…まっ、今は無くても困らないから良いがな

考え事は、終わったし…外に出て見るか

「うーん…はあ、長時間同じ体勢だったから、体のあちこちが痛えし、何も着てないから寒いな」

俺は立ち上がって体を伸ばし、着る物を探した

「ボロしか無かったけど…」魔神の記憶を頼りに作って見るか

？は魔法を使い、一瞬でかなり丈夫な服一式を作った「まあ、取り敢えずはこれで良いか」

服も作ったし、外に出るか…外に出るには…風が向こうから来てるから、風を辿って行けば外に出られそうだな  
歩いて一時間後…

「それにしても、何も無いな。

これって外に繋がってるのか？さっきから同じ道…」

俺が愚痴を1人で言っていると…

うん？…おっ、微かに光が見えてきた。これならもう少しで出られそうだな

光が出てる所に着くと…

「おいおい、また魔術かよ」

目の前に巨大な岩が塞いであり、さらに、岩の中に仕掛けが施され

てあつた

ったく、やっと出られると思ったのによ…

「今度は何の魔術だ？…最上級魔術、属性土と火の混合。解く方法は、闇、空間の魔法か」

効力は無いが洞窟側から衝撃を与えると、爆発する仕掛けがあるな

「まったく、手の込んだ仕掛けだな」闇の魔法はさっき使ったから、今度は違つのを使つて見るか

先ずは…

「空間よ」

岩を覆える程の空間の裂け目を作り、裂け目に岩を落とす…

後は…

「風よ、衝撃波」

風の衝撃波を岩に当て、爆発や爆風を外に出さないよう、空間を閉じて行くと…

ドンッ

流星は最上級魔術、空間の中で爆発したつてのに此処まで音がするのか…

「まあ、取り敢えず成功だな。外に出るまで長かった気がするけど、まあ良いか」

外に出て…

眩しっ、俺は右手で太陽の光を遮りながらそう思った

光りに慣れると…

「うわぁ、凄えな」

辺り一面に、大草原が広がっていた

魔物も居るけど…

「何と言うか、穏やか…」

うん？

「何だ、あれ？」人が、魔物に追われてる？

うーん、少し遠すぎて種類が分かんないが…

「丁度腹も減ってきたし、序でに助けるとしますか」

先ずは奴の注意を引くか

「土よ、剣に」

俺は土で固めた剣を作り、それを魔物に向かって投げた

ヒュンッ

土の剣は音速を越えるスピードで、魔物に向かって行った

ドゴーンッ

が、土の剣は魔物に当たる事なく地面に深く突き刺さった。魔物は  
当たる前に気付き回避した

「へえ、これを避けるって事は結構ランクが上の方か？」  
それとも、まぐ…

この殺気は…

「どうやら、まぐれじゃなさそうだ」

魔物は人間を追うのを止め、俺に向かって突進してきた

「そつちが突進なら…受け止めてやる」  
俺が受け止める姿勢をすると…

ドドドドッ！

魔物はさらにスピードを上げた

牛に似てるけど…

「あの魔物は…」

俺の記憶には無いな。どうゆう事だ？

「ブホオオオ！」

おっ、もう目の前か

「考え事は後回しだな」

俺と魔物が衝突し…

ドンッッッ！！

俺は魔物の角を掴み抑えたが、衝撃が強過ぎ…

ビシシシッ！

衝撃が俺の足から後ろの地面に伝わり、俺を中心に半径5mの地面をひびだらけにした

予想以上に衝撃が強かったみたいだが…

「俺には関係、無い！」

角をさらに強く握り、首をねじ曲げた

ゴギリッ

首から鈍い音を出し、魔物は絶命した

俺は適当な所に座り考えた

うーん…

「やっぱり、分かんねえ」

この魔物の名前と種類が記憶に無い

「もしかして新種？」

いや、記憶によるとこんなの居なかった筈…

「おい、聞こえてるか？」

「あ？何だ？」

俺は声が聞こえた方に振り返った

「…誰だ？あんた？」

俺の目の前には、必要最低限の鎧を着た男が居た

「俺の名はカルムだ」

「どうも俺は…」

そう言えば、名前が分からなかったな…どうするか…  
「どうした？」

名前が無いんだから…これだな

「俺はナナシだ」

「そうか…まあ宜しく」カルムはそう言い、手を差し出してきた

なるほど、そうゆう事が…「ああ、宜しく」

俺は差し出された手を握った

「？」

カルムは一瞬だけ不思議な顔をした

やはり俺の実力を測る為の握手か…カルムは隠してたつもりみたいだが、魔神の体は騙せなかったな。強さは、騎士団の副隊長クラスってところか…

「で、カルムは何しに来たんだ？」

「俺はナナシに助けて貰ったから、礼を言いに来たんだ」

「俺が、助けた？」

「ああ、そこで絶命している奴の事だ」

あー、こいつか…そうだ

「こいつの名前とランクを教えてくれるか？」

「良いが、どうしてだ？」

まだ探ってるのか？

「この魔物を初めて見たんだ」

「そうか、まあ確かに見る機会は少ないからな。こいつの名前はブルドーって奴で、ランクはSランクだ」

成る程…

「教えてくれてありがとな」

「それは良いんだが…こっちも質問して良いか？」

質問は良いんだが、気付いて無いのか？

「ああ」

「じゃあ聞くが、ブルドーをどうやって倒したんだ？」

随分と真剣に聞いてきたな。だが、此方に集中してるからか…

「気付いて無いな？」

「何にだ？」

はあ、駄目だな

「あれを見れば分かる」

俺は指を差して教えた

「うん？…何っ！！」

カルムは、俺が差した方向を見た瞬間走り出した

足を魔力で強化してる様だが…

「それじゃあ、間に合わねえよ…属性強化、雷」

俺は雷で足を強化して…

バチバチッ

「取り敢えず、助けたらすぐに移動するか」

シュンッ

僅かな音を出し、居た場所から一瞬で消えた

あいつは…ベアードか？

「ベアードは確か…熊の魔物の筈なんだが…」

何か、形態が違っただよなあ、あの魔物は熊に猪を合わせた様な魔物だし…

それに…

「あの戦おうとしてる連中は、中心に居るロープの人を守る様な陣形をとってるから…十中八九何処かのお偉いさんって所か」

うーん、様子見も兼ねて…「こちら辺で良いか…光よ繋ぎ縛れ」

俺は100m離れた所で、魔法を使った

グルッ!?

魔物や…

「「「!?!?!?」」」

戦っていた人達が驚き此方を見た

「ガァァ」

魔物は暴れ光の鎖を壊そうとするが…

ジャラジャラ

「無駄だ。その程度じゃ壊れない…それに暴れ過ぎると余計にきつくなるぞ?」

ギリギリッ

「ガッ!」

まっ、この距離じゃ聞こえないか…

「土よ、閉じ込めろ…」

魔物を中心に土が溢れ出てきて、一瞬で半球の土に閉じ込め…

「火よ、焼き尽くせ」

更に呪文を唱えた

「ガァァァ…」

まっ、こんなもんか…

「土よ、沈めろ」

魔物の死骸を土の中に埋めた

さてと…

「戦つてた奴等が来る前に離れよう…属性強化、雷」  
バチバチ

シュン

足を雷で強化した後、消える様な速さで移動した「隊長、此処は私が残ります。姫様をお願いします」

「そんな！？待って…」

「分かった…シンク生きて帰って来い」

「分かってますよ…さあ早く！」

「無茶です！相手はSランクのブルドーなのですよ！？それに1人じゃ…」

「姫様失礼します」

姫は手を引つ張られるが…

「待って、あの人…」

「姫様！シンクの思いを無駄にはなりません！」

「ですが…」

「さあ行きますよ」

姫は強引に手を引かれ…

「シンクさん…ごめんなさい」

涙をこぼしながら、その場から離れた

姫は手を引かれ続け森の出口まで来た

「見ろ、森の出口…」「ブホオオオ」

？の声を遮り近くからブルドーの鳴き声が聞こえてきた

「くっ、シンク…皆走れ！奴から距離を離すんだ！」

？は悔しそうに齒軋りをしながらも、姫の護衛達に指示をだした

《はい》

姫の護衛達は？の指示に従う事にした

「姫様走れますか？」

「ええ」

「では、急ぎましょう」

「はい」

姫達は走り距離を離そうとしたが…

「ブホオオオ」

森を出た直ぐ後に追い付いて来た

「流石はSランク、もう追い付いたか…仕方がない。姫様を守りながら戦うぞ」

護衛達は？の指示に従い、腰に付けてある鞘から剣抜いた

「ドレクさん…」

「大丈夫です。例えこの身が滅びようとも、姫様だけはお守りします」

「そうゆう事では無いのです。怪我はしないで下さい」

「勿体ない言葉を…分かりました。王国騎士火の団隊長ドレク」  
ツケルの名にかけて…」

ドレクは左胸に手を当て、誓おうとしたが…

ドゴーンッ

突然のでかい音に遮られた

「な、何だ！？」

「隊長、あれです」

護衛が指差したのは…

「土の剣、ですか？」

ナナシが投げ飛ばした土の剣だった

「確かに土の剣ですね…それに、魔力に私が気付けなかった」

ドレクは不思議に思いながらも気付けなかった事に悔しさも感じていた

「気付けなかったのは私もです。どんなに微弱でも魔法使いなら気付ける筈なんです…」

姫は言葉を止め、魔力を帯びた剣を見た

「一体何処から…」

「ブルルル」

ブルドーはナナシに殺気を放つと…

「ひっ」

自分に向けられていないと、分かっているけど、あまりの殺気に姫は、思わず悲鳴をあげた

「どうしました!？」

ドレクは姫の悲鳴を聞き、駆けつけた

「い、いえ大丈夫です。それよりあそこに人影が…」

姫は怯えながらも丘の上に立っているナナシを指差した

「本当ですね…まさか、あの距離からブルドーを？」ドレクは指差された場所を見て、推測した事を姫に言うが…

「それは私にも…」

姫も分からず、困っていると…

「ブホオオオ」

ブルドーが丘へ走りだした

「ブルドーが向かったって事は狙ったみたいですね…この隙に城に戻りましょう」

ドレクはブルドーが丘へ走りだしたのを見て、推測から確信へと変わった

「あの人を助けられないんですか？」

ドレクの発言を不思議に思い問いかけると…

「きっと大丈夫ですよ…」ドレクからは、不安な言葉が返ってきた

「助けてあげて下さい」

姫はその不安な言葉を信じられず、ドレクに言うところ...

「し、しかし！」

ドレクは姫の言葉を否定しようとしたが...

「お願いします」

姫がドレクの言葉を遮り、必死に頼むところ...

「わ、分かりました。では少し待っていて下さい」

ドレクは、姫の必死の頼みに折れ、護衛達の元へ向かった

「はい」

「皆集まってくれ」

「はい」

ドレクは護衛達の所へ着き、皆を集める...

「うーん、カルムあの丘へ行ってきたくれるか？」

護衛の中から1人選び、聞くと

「大丈夫です」

カルムと呼ばれた男は、行けると返事を返した

「ありがとう。それと、行動はカルムに任せるが、お前が優先だ。これを覚えて行け」

ドレクはその言葉に正直に感謝して、言葉を追加した

「分かりました。行ってきます」

カルムその追加された言葉を理解し、魔力で足を強化し丘へ向かって走りだした

「姫様、此処は危険なので城へ向かいましょう」

ドレクは姫の所へ戻り、提案を出す……  
「分かりました」

姫は少し不安ながらも、ドレクの提案を受け、城へ急いだ……

## 1話（後書き）

前より読み易くなっ  
てれば良いのですが…  
こんな作者ですが、  
宜しく  
お願い  
します

## 設定（前書き）

この小説の参考になった本

## 設定

魔物、魔獣ランク

F・・・殆ど無害な魔物

E・・・初心者でも勝てる位

D・・・初心者3人なら勝てる位

C・・・熟練者なら勝てる位  
(熟練者は初心者5人分)

B・・・熟練者5人なら勝てる位

A・・・小さな村を破壊出来る位

S・・・小さな街を破壊出来る位

SS・・・大きい街を破壊出来る位

SSS・・・国を破壊出来る位

(SSSランクは撃退した事はあるが、倒した者は誰もいない。  
)

(獣系は魔獣、獣系意外は魔物) 村・街・国の人数設定

小さい村・・・60～100人

中くらいの村・・・300～500人

大きい村・・・1500～2500人

小さい街・・・3000～5000人

中くらいの街・・・1万5000～3万人

大きい街・・・5万～10万人

国・・・50万～300万人

ギルドランク

F～D・・・初心者

C～B・・・熟練者、王国兵士並

A・・・王国騎士団兵士並

S・・・王国騎士団副隊長並

SS・・・王国騎士団隊長、近衛兵士並

SSS・・・賢者、帝並

（魔物のランクと比べると、F～Bは1ランクA～SSSは2ランク下がる）

魔法・魔術

初級魔法…子供でも扱える簡単な魔法。強さは無害な物～小さな木箱を壊す位

中級魔法…魔法使いなら扱える魔法。強さは無害な物～建物を半壊

出来る位

上級魔法… Bランクから扱える魔法。強さは無害な物ゝ建物を2、3軒破壊出来る位

最上級魔法… Sランクから扱える魔法。強さは無害な物ゝ城を半壊出来る位

初級魔術… SSランクから扱える魔術。強さは無害な物ゝ地形を少し変える位

中級魔術… 賢者、帝がやつと扱える魔術。強さは無害な物ゝ島を破壊出来る位

上級魔術… 古代人、勇者が扱えた魔術。強さは無害な物ゝ大陸を少し削る位

最上級魔術… 特殊な魔方陣を構築出来る者が扱える魔術。強さは無害な物ゝ大陸を破壊出来る位

（魔術は古代魔法）

## 設定（後書き）

大体の設定ですが、変える事もあるかもしれません

## 2話（前書き）

やっと完成しました

## 2話

姫達はもう少しで、大草原を抜ける所まで来ていたが、突然左の森から魔物が出てきた…

「ッ！！」

出てきた魔物の正体に見た事があるドレクだけが驚く

「何故こんな所に…」

その魔物の正体は…

「古代種が居るんだ」

魔物の正体は、古代種と言われる魔物だった

「嘘だろ、古代種って確か…ドラゴンと同等の強さを誇るって言う

…」

ドレクの古代種と言う言葉を聞き、護衛達が驚き…

「もう駄目だ」

自分達の死を確信した

「諦めるな！」

ドレクは護衛達に渴を入れるが…

「すいません隊長。こ、腰が抜けて…」

護衛達は古代種を前にして、腰が抜け戦う事が出来なかった

「なら、お前達は姫様を連れて逃げろ！」

ドレクは古代種からは目を離さず腰に付けていた二本の剣を抜きながら言った

「で、ですが隊長相手は…」

「グルッ？」

「ッッッ！」「ッ」

「何だ！？」

ドレクや護衛達は、突然古代種に巻き付かれた光の魔法を見て驚いた

ドレクは光の鎖を辿り出所を調べると…

「あれは…まさか丘に居た奴か？ならカルムは何処に…あれか」

丘を見ると人影が無い事を確認し、自分の部下の姿を確認すると見  
つかり、少し安心した

「ガァァ」

ジャラジャラ

古代種が暴れて解こうとするが、壊れないのを見ると…

「一体どんな魔法構造してるんだ？1人で魔法を発動してる筈なのに古代種が解けないなんて…」ドレクは不思議に思っている…」

ギリギリッ

「ガッ！」

そこから一瞬で勝負がついた

古代種が土に飲み込まれ…ゴオオオオ

「ガァァァ…」

土の中で燃える様な音と共に古代種の断末魔が聞こえて、暫くすると断末魔も無くなり、最後に土が崩れる様に古代種と一緒に元の地面へと戻った

「古代種は死んだらしいな」ドレクの言葉を聞き、護衛達は次々に倒れる様にして座った

「そう言えば、奴は？」

ドレクはナナシの姿を探すが…既に居なくなっていた  
「居ないか…次会えたらお礼を言いたいものだ」

「私も、です」

ドレクの言葉に姫も同意した

「だ、大丈夫ですか！？」姫の状態を見て、取り乱すも…

「ええ、少し休めば大丈夫ですから、落ち着いて下さい」

「はい」

姫の言葉を聞き、落ち着く事にした

「隊長、無事ですか？」

カルムが漸くドレクの元に戻った

「ああ。何とも無いが…丘で何かあったのか」

「ええ、実は…」

カルムは丘であった事を話した

とゆう事があったんですよ」

「そうか、あいつはナナシと言うのか…」

「ナナシさん、ですか…今度会えたらお礼を言いたいですね」

「ええ…さつ、城へはもう少しですから頑張らしましょう」

「はい」

姫達はナナシに恩を感じながら無事に城へ着いた

くナナシく

魔物を倒した後、その場所から離れたは良いがブルドーを置き忘れたの思い出し丘へ戻った

「確かここら辺に…おっ、あったあった」

俺はブルドーに近づくと…

ん？

「何か、妙な気配が森に現れたな…行つて見るか」

俺はブルドーを空間の中にしまい森へ向かった

森の手前に着き…

「取り敢えず、何が起るか分からないし…闇よ、展開」  
森一体を闇で囲んだ

「後は、闇よ、気配を消せ…これで良し」

黒い影が俺を包んだのを確認し森の中へ入った

暫く森の中を歩いていると…

「妙な気配の正体は、あいつか」

俺の目の前には、体の色全身真っ黒で、目が赤い不気味な猿の様な生物が居た

「何だ、隊長格じゃねえのか。まっ、それでも副隊長だしなギヒヒ」

不気味な…猿で良いや、猿の近くに誰かが倒れてる様だが…

「笑い方気持ち悪っ」

猿の笑い方につい本音が出てしまった

「さてと、まだ息がある様だが…始末するかギヒヒ」

猿が手に持っていた斧を振り落とす…

ガシッ

前にナナシが猿の腕を掴んだ

「させねえよ」

「！？誰だてめえ！」

突然の事に猿は戸惑っていたが、掴まれている事に気付き掴んでいるナナシに吠えた

「教えると思うか？」

俺は猿を茶化すと…

「なら、死ね。フレイムボム！」

猿は斧を持ってない方の手で手のひらサイズの火の塊をナナシに放った

ズドンッッ！

火の塊はナナシに着弾し、

ナナシを中心に3m程の火柱が立った後、煙が周りを覆った

「上級魔法を詠唱破棄か…随分と賢い猿だな」

「まだ喋れる程の元気があるようだが、体はボロボロだろうなギヒヒ」

「はあ、見てから言えよな…風よ、吹き飛ばせ」

ナナシが唱えた直後に風が吹き煙を飛ばした。

煙が無くなり、ナナシが見えると…

「ッ！？何故だ！何故お前は…」

ナナシには…

「無傷なんだ！」

一切傷は付いていなかった

「さあな、俺が知りてえよ。まっ、体が丈夫なんだろ」

「ただ上級魔法が当たっても、服も破れなかったし、体に痛みが無かったのはびっくりしたな」

「化け物が！」

化け物、か…まっ、無力よりは良いや。それに…

「てめえは、見た目が化け物だろ？」

「言われるだけってのは、な」

「何だと！てめえは絶対に殺す！」

猿はそう良い、ナナシに飛び掛かって来た

言われただけで、怒りに任せるなんて…

「愚かだなっ」

俺は、飛び掛かって来た猿に回し蹴りを放った

「グブツ」

バギツバギ…

猿から骨が折れる音が聞こえるも、ナナシは気にせず蹴り抜いた

あまり力は出してない筈なんだが…

「これは力を加減した方が良いな」

ナナシが猿を蹴っ飛ばした方には木々が風ぎ倒れていた

「ゲホツゲホ、はあはあ、何て、奴だ。くそっ、此処は一旦引き上げるか」

聞こえてるって、それと…

「俺を殺すんじゃないのか？」

俺は強化せずに猿の後ろに一瞬で回り込み一言

「！？…逃げるのは無理みたいだなギヒヒ」

何んで、笑ってたんだ？怪しいな…

「何だ？威勢が良いのは最初だけか？」

あれで怒ったんなら…

「おめえから逃げるのを諦めただけさ、ギヒヒ…」

猿は懷から拳より少し大きい石取り出し…

あれは…

「ッ！」

あの人が危ねえ！

俺は猿が取り出した物を見て駆け出した

「今更遅えよ！」

バギッ

勢いよく握り潰した

すると…

ヒューー

石から膨大な魔力が溢れ出て暴走し…

ズドーーーーンッッッ！！！！

大爆笑した

「ふう。つたく、とんだ置き土産だぜ」

あの魔力量だと…中級魔術位、か

シューー

それにしても…

「体から煙が出るの、初めて見たな」

マンガやアニメしか見た事無いぞ？

「うつ」

呻き声がナナシの下から聞こえた

ん？そう言えば、人を守ってたな

「解除…気付いたか？」

俺は咄嗟に人に張った光の壁を解き、声を掛けた

「此、処は？ぶふつ、ゴホツゴホ」

おいおい、よく見たら凄え怪我だな

「少し寝てろ」

俺は、記憶にあつた睡眠効果のある魔方陣を手に構築し、その手を人のでこに乗せ眠らせた

さてと…

「水よ、光よ、彼を癒せ」

薄い水の膜が人を包んだ後、優しい光が一瞬光り、水の膜も消えた

「これで良し。後は…起きるまで、腹ごしらえをするか」俺は空間からブルドーを出し調理した

「しかし、猿の野郎自然破壊しやがって、闇の結界を張ってたからこれで済んだってのに…」

俺は捌き終わるまで1人事を言っていた

ナナシの言った通り、張った結界内の周りには何もなく、只地面だけが広がっていた

捌いてる途中で…

「何だこれ？」

真珠の様な物を見つけた

取り敢えず、今はしまつとくか

ナナシは空間に真珠を入れ捌くのを再開した

数分後

捌き終わったし…

「後は焼くだけだな」

俺は風のナイフを作り、肉を適当に切り…

「火よ、燃えろ」

地面に作った魔方陣の上に火を付け、風の魔法を使いながら焼いていった

「改めて思うが、地球の記憶が無くなってきたなあ」  
知識は残ってるけど、記憶が無くなってきてる

はあ…

「まっ、今はこのベツツエルに居る事だし…頑張って生きるか」  
そう結論し、焼くのを再開した

「もう少しで、焼けるんだが、あいつは…」

ナナシは、人を寝かした所を見て…

「はあ。まだ、寝てるのか…仕方ない起こすとするか」  
何だかんだ言いつつも、シンクを起こす事にするナナシだった

シンクに近づき…

「おい、起きてるか？」  
「…」

駄目か、それなら…

「雷よ」

俺は静電気より少し強い電気を手に集め…

「起きろって」

バチッ

「!!!!!!?」

シンクの腕を握ると飛び起きた

「ほお、面白れえ反応」

また、誰かにやって見るか

ナナシは密かにそんな事を思っていた

「だ、誰ですか?」

「まあ、誰だつて良いじゃねえか取り敢えず起こした事だし飯にするか」

「いや、良くないです、って話を聞いて下さいよ」

まったく面倒だな

「分かった、分かった。話しは飯を食ってからな」

「分かりました」

そう良い、シンクは立って待つ事にした

「お前は食わないのか?」

「えっ? 食っても良いんですか?」

シンクは驚き聞くと…

「ああ。俺1人じゃ食いきれないからな」

俺はそう言い、肉を渡した

「えっ、えーと、それじゃあご馳走になります」

シンクは座り、肉を食い始めた

「あつ、美味しい。これは何の肉何ですか？」

と？はナナシに聞くと…

「それはブルドー、って大丈夫か？」

ナナシはシンクに何の肉かを答えると咳き込んだ

「え、ええ大丈夫です。それよりブルドーって本当ですか!？」

シンクは大丈夫と答えると、ナナシに詰め寄り聞いた

「ああ。そうだが、どうしたんだ？」

俺は不思議に思い聞くと…

「実は…

シンクは姫達の事を隠しながら、自分はブルドーと 戦って負け、大怪我をし、倒れていたと言う事を話した

こうゆう事なんですよ」

なるほど、じゃあ…

「あんたはカルムの仲間か？」

俺はさつき教えて貰った情報を整理し、質問すると…

「何故その名前を!？姫…あの方達は大丈夫なんでしょうか!？」

姫って、あの中心に居た奴の事なのか?…

「ああ。あの集団は大丈夫だから落ち着け」

それに何で興奮してんだ？

「す、すいません」

…うん?よく見たら左の胸辺りにカルムと一緒にの紋章…そうゆう事

か。まっ、取り敢えず…

「心配なら見に行こうぜ」

俺は立ち上がりながら言う…

「えっ？一緒に行くんですか？」

シンクは不思議に思いナナシに尋ねると…

何言ってるんだか…

「当たり前だ。折角助けたんにまた死ぬ様な目に会ったら、助けた意味無いだろ？」

「うっ、それを言われると何も言えませんか」

「だろ？なら行くぞ」

「はい」

ナナシ達は城を目指すのだった

## 2 話（後書き）

読んで下さりありがとうございます

### 3 話（前書き）

誤字が見つかりましたら、教えてください

### 3話

城に向おうとした時…

「あつ、そう言えば…」

うん？

「どうしたんだ？」

シンクが何かを思い出した

「あの、遅れましたが自分はシンクと言います」

あー、そうゆう事が…

「俺はナナシだ。まあ宜しく」

俺も名前を言い返した

「はい。宜しくお願いします」

「おう。それで話しは変わるんだが…城ってどっちだ？」

「それでしたら、自分が案内しますよ」

なら良かった。城へ行くと云ったが、何処の城へ行くか分からなかったからな

「じゃあ、頼む」

「ええ。任せて下さい」

シンクが先頭に立ち、城へ向かった

城へ向かう途中…

うーん…やっぱりわかんねえな。この方向に城なんて無かった筈なんだが…

「どうかしたんですか？」

新しく出来た国なんだろう「いや、この方向に城があつたなんて知らなかったからな」

「えっ？キアール王国を知らないんですか？」

キアール王国？

「何処だ？」

「自分達が行く王国ですよ。このオルフェン大陸の中でもかなり大きい筈なんです…本当に知らないんですか？」

オルフェン大陸は分かるが、キアール王国何て聞いた事が無いしな…そうだ…

「パスタキア王国を知ってるか？」

パスタキア王国はオルフェン大陸の中で一番でかいし、勇者が最初に誕生した国でもあるから、知らない奴は居ない筈だ

「パスタキア王国…何処の大陸にあるんですか？」

は？

「いや、何処ってこのオルフェン大陸にあるだろ？」

「いえ。このオルフェン大陸にキアール王国以外に大きいのは、ガ  
ンダル帝国、フェルナルド中立国位しかありませんが…」

どうゆう事だ？両方の国も知らないぞ……待てよ…

「ならでかい戦争とかあったか」

「そうですね…10年前にドトール帝国が4国の間で交わした契約  
を破ったので、ドトール帝国を攻め落としました」

ドトール帝国も知らねえ…それに俺なら別だが、4国がどんなに大  
きくても、パスタキアは攻め落とせる訳無いしな…

「分からねえな…なら、何か凄い話とか、神が居るとかそんな話  
しは聞いた事無いか？」

まっ、この世界に精霊王は居るが、神は居ないけどな

「凄い話ですか…絵本の話でも大丈夫ですか？」

絵本かあ…取り敢えず…

「ああ、聞かせてくれ。出来れば短く簡潔にな」

「ええ。遠い昔に邪悪な化け物が居て、化け物は魔物を作り出し国  
々を襲っていました。その時勇者が現れて、魔物を倒し化け物も倒  
す。と言うお話です」

うーん、かなり歪んでるが多分これだな

「その遠い昔ってどの位昔なんだ？」

「正確には分かりませんが、軽く数千年は昔だと思います」

確かじゃないとしても、数千年、か。俺はそんなに封印されて居た  
のか…

「大丈夫ですか？」

シンクは心配そうにナナシに声を掛けた

昔なら昔で良いか。それに今は今で何があるか興味があるしな

「ああ、大丈夫だ。それより変な事聞いて悪かった」

「いえ、大丈夫ですよ」

「そうか。なら城に行こうぜ」

「はい」

ナナシ達は、その後色んな話をしながら城の門に着いた

城の門に着くと…

「そこの者達止まれ」

ん？誰かが呼ばれたのか？まあ人は一杯いるしな。俺はそんな事を思いながら、普通に進んで行くと…

「止まれと言った筈だが？」

どうやら俺達の事らしいな…それより…

「この剣を退けるよ」

何で剣を突き付けられなきゃなんねんだよ

「そうはいかん。通行書が無ければ通す事は出来ん」「皆、普通に通って居るが？」

「それ…」

「それはあそこにある、魔石に登録すれば通れるんですよ」

シンクは門の手前にある灯籠の中にある魔石を指差した

シンク？

「俺が今…はっ、ふ、副隊長！？」

おっおっ門番の野郎、シンクの顔を見た瞬間血の気が一気に引いて  
らあ

「自分の連れです。通りますよ？」

「どうぞ、お通り下さい」対応が随分と変わったなあ

「さっ、行きますよ」

「おっ」

門を通って…

「なあ、あの魔石って、なんだ？」

あんなの俺が封印される前は無かったから興味がある

「あれは、通行書を魔石に登録してないと、門番に知らせる物です…  
まあ簡単に言えば、持っていない者は調べろって事ですょ」なるほど…  
早速興味深い物が出てきたな…

「だが、何故調べるんだ？」

「それは、今から5年前の出来事です。突如魔人と名乗る者が王国  
の住宅地を焼け野原にしたのです。その出来事から、簡単には出入  
り出来ないようあの装置を設置する事にしたんですよ」

そうだったのか…

「その魔人の特徴とかは分かってるのか？」

「今分かっているのは、擬人化する事、体の何処かにナンバーがある  
事、そして目が赤い事です」

目が赤い？

「それって、猿の様な奴も居たか？」

「さあ、そこまでは…襲つて来た奴は擬人化をして一部分を隠して  
いましたので…」

「そうか…」

擬人化なら、体の何処かに本来の姿の一部は出てるから分かると思  
つたんだが隠してるなら無理があるよなあ

「お役に立てなくてすいません」

シンクはナナシに頭を下げようとしたが…

「いや、別に謝る必要は無いさ…」

ナナシに止められた

「それに、着いたぜ」

ナナシ達は話してる間に城の手前に着く所まで来ていた

「あつ、本当ですね」

「んじゃ俺は行くぜ」

俺は立ち去ろうとしたが…

「えっ？まだお礼をしてないですよ」  
シンクに止められた

「要らねえよ、礼なら言葉で十分だ」

「それじゃあ自分が納得出来ません」

いや、俺が要らないって言ったよな？…おつ、そうだ…

「なら、門の時に助けて貰った礼がある。それでチャラって事で」  
俺はそう言い逃げる様に走ってその場を後にした

「後でまた会えたら、ちゃんとしたお礼を受け取って貰いますよー」  
シンクはそう叫んだ後で、城へ向かった

シンクは城の中へ入るとある違和感を感じた

「今日は隊員が少ないですね。どうしたんでしょう？」シンクは考えて居ると…

「なあ、聞いたか？」

「何をだ？」

「？」

シンクは隊員の話し声が気になり、聞き耳を立てると…

「風の団のシンク副隊長居たる？」

「ああ、それがどうしたんだ？」

「自分がどうかしたんでしょうか？」

シンクはそう不思議に思っ居ると…

「シンク副隊長…死んじまったらしいぜ？」

「マジかよ、だから隊長達が集まって居た…」

シンクは自分が死んだとゆう話を聞いて隊員に詰め寄った

「それって、本当なんですか！？」

「シ、シンク副隊長！！？」

「その話って本当なんですか!？」

シンクは再度同じ質問をした

「は、話は本当らしいですが…」

「隊長達は何処に!？」

聞きたい事が聞けると、隊員の言葉を遮り違う質問をした

「隊長達なら庭に…」

「ありがとうございます」

シンクは隊員の話の聞くと礼を言ってから、庭へ急いだ

「な、なあ、あれってシンク副隊長だよな？」

「ああ、その筈だが…」

その後も隊員達は茫然としていた

「だけど、何故隊長達は庭に? 確かこの時間は第一姫様の稽古の練習をしてる筈なんですが…」

シンクはそんな事を考えながら走っていると…

ドンッ

庭に着く少し手前で誰かとぶつかり、シンクだけが尻餅を着いた

「おいおい、城内を走るならもう少し気を付け…シンク!？」

「す、すいません。…ってその声はドレク隊長!？」

「お前生きてたのか!？」

「はい。人に助けて貰い何とか…」

シンクは立ち上がりながら言った

ドタドタ…

「ドレク何かあったのか？」

ドレクの大声を聞いた各隊長達が集まった

「フィーナ隊長に、シーク隊長、ラボル隊長、ドルタス隊長！？」

「ドレクよ、シンクは生きてる様じゃが？」

老人のドルタスは自分の髭を撫でながらドレクに言った

「ええ…シンク誰に助けて貰ったのかを詳しく教えてくれるか？」

「分かりました」

シンクはナナシに助けて貰った事から、この城まで連れて来て貰った事まで話した

「そうですか…姫様やドレクだけでなく、私の部下も助けて貰った様ですね」

女性のフィーナがそう言うのと…

「その様だね。ねえねえシンク、そのナナシって言う人に、僕会って見たい」

子供位の背丈しかないシークがそう言うのと…

「わしも興味があるのう、今日はもう遅いからシンクよ、明日そのナナシ殿を連れて来ておくれ」

「えっ？えーと…」隊長2人に頼まれシンクがどう返事を返そうか困っていると…

「それは良いですね」

突然シンクの後ろから声がした

「えっ？…姫様！？」

シンクは後ろを振り向き姫の姿を確認すると、驚き跪つく姿勢を取るが…

「良いです。それより、ナナシさんをこの城まで連れて来てくれませんか？助けて貰ったお礼も言いたいのです」

姫に止められた後、隊長2人と同じ様な事を頼まれた

「は、はい。それでは、行ってきます」

シンクは姫に頼まれたので、急ぎナナシを探そうとしたが…

「いえ。今日はもう遅いので、後日お願い出来ますか？」

「はい。大丈夫です」

その後シンクは、ナナシの事を詳しく聞かれたので、姫と隊長達で暫くナナシの事を話していた

くナナシく

城を離れ、来た道を戻って案内図を見ていると…

「何か寒気がするな…風邪か？」

そんな事を言いながら再び、案内図を見た

「うーん、やっぱり何時の時代でも貴族は居るんだな。まあ、昔より良い様だな」

案内図を見ると、城を中心に貴族、広場、平民と円形に広がっていた

「何か面白い場所は…おつ、酒場があつた。此処なら色々な情報がありそうだな」俺は地図を見て、酒場に行こうとしたが…

「そう言えば俺、金持ってたねえんだつた…」

そうナナシが困って居ると…

「おつ、お前ラングロットを狩ったのか？」

ラングロット？また新しい名前が出てきたな

ナナシは興味がわき、2人の会話を聞いてみる事にした

「ああ。コイツの肉は売れるからな」

「なあ、それを売ったら、俺に何か奢ってくれよ」

「うーん、しょうがねえな。じゃあ付いて来いよ」

「おつ。ありがとな」

肉が売れるんだつたら、ブルドーの肉も売れるか？

「野郎の後を付いて行くのは嫌だが、この際仕方ねえか」

ナナシは嫌な顔をしながらも付いて行く事にした

暫く付いて行くと…

「ギルド？」

一際大きい建物に着いた

確かアニメやゲームで、出てくるあのギルドか？

「まあ、行つて見るか」

ギルドの中に入った瞬間…

ん？複数の視線…俺を見た奴の殆どが実力者だな

俺は気にせず受付に向かうと…

「おい、待てよ」

突然大男が立ち塞がった

「あ？何だ？」

「此処は、てめえみたいなヒョロイのが来る所じゃねえんだよ」

何で絡まれんだよ

「うるせえよ。何だ来るのに、一々てめえの許可がいるってのか？」

「あ？この俺が親切に教えてやってんのに…」

「そこまでにしな！」

突然女の声が、大男の言葉を遮った

誰だ？

俺は声のした方に振り向くと…髪が赤く、顔が凜としている女の人  
が腕を組みながらやってきた

「また、アンタか」

女の方はやれやれとした表情をしながら言った

### 3 話（後書き）

読んで下さりありがとうございます

#### 4話（前書き）

上手く書けてはいませんが、少しグロを入れてみました

## 4話

女の正体は…

「ギ、ギルドマスター!？」

大男は女の人を見付けると顔が真っ青になった

「ギルドマスター？」

「おや？アンタは見ない顔だな」

俺の事が…

「ああ。初めて来たからな」

「そうか…初めて来たのに悪かった」

女なのに男口調？

「いや、此方こそ騒ぎを起こして悪かった」

正直あいつの相手を続けていたらぶっ飛ばす所だった

「取り敢えず、アンタのランクをAからBランクに下げるからな」

「は、はい」

大男は返事をし、ギルドから出ていった

あいつってAだったのか

「それで、アンタは何しにギルドに来たんだ？」

肉を売りに来たんだが…

「その前に此処って魔物の素材とかを買ってくれるのか？」

此処で売れなかったら用は無いけどな

「ああ、魔物の素材なら何でも買っけど…何を売ってくれるんだ？」  
魔物の素材なら何でも良いのか…

「取り敢えず、ブルドーの肉を買って欲しいんだが…どうした？」

何故か、ギルドに居る奴等全員が俺を見てるんだが…正直野郎が殆どだからキモい

「アンタはギルドカードを持っているか？」

「いや、ギルドの中に入ったのが初めてだから、そのギルドカードと言っ物は持ってない」

「そうか、うーん…」

何だ？もしかして…

「カードが無いと売れないのか？」

「売れない訳じゃないけど、ブルドーの話は本当なのか？ブルドーの肉を持っっている様には見えないが…」

あー、そいゆう事か。俺がブルドーを持ってないから、疑ってるのか…

「場所を変えてくれ、そうすれば見せられる」

此処で出すと、血生臭くなるからな

「…分かった、じゃあ付いて来い」

ギルドマスターは少し考え話した後、ギルドを出ていった

「あいよ」

ナナシもギルドマスターの後を追いギルドを出ていった

暫く付いて行くと…

「解体屋？」

解体屋と看板が張ってある倉庫みたいな所に着いた

「ジルー、居るかー？」

ギルドマスターは、誰かの名前を呼ぶと…

「おう、用があるなら此方に来てくれー」「だってよ、行くぞ？」

「ああ、分かった」

俺達は中へ入り、声のした方に歩いて行くと、人影が見えてきた…

「何だ、レヴィか」

男はギルドマスターを見て言った

「レヴィ？」

ギルドマスターの事か？

「私の名前さ…そう言えば自己紹介してなかったな。私の名前はレヴィ・フローレン…で、この人がジル・ダグラス」

「ジルって、呼んでくれ」

見た目は普通の30代って所か…

「ああ、宜しく」

「私もレヴィで良い」

「分かった…俺はナナシだ。まあ、宜しく」

「おう」

「宜しく頼む」

「それで、俺に何か用があつたんじゃないのか？」

「そうだった、そうだった。用は魔物を捌いて欲しいんだが…」  
そこでレヴィは言葉を止めナナシを見た

「捌くのは良いが、その魔物は？」

問題の魔物が無い事に気になり、レヴィに問い掛けると…

「俺が、今から出す」

レヴィではなく、ナナシから返事が返って来た

「出す？ 一体何処から？」

説明が面倒い…

「まあ見てなつて、それより、此処に出して良いのか？」

「？ ああ、何処でも良いぞ」

不思議に思っていたジルだったが、ナナシに聞かれたので返事を返した

じゃあ俺の目の前で良いだろ…

「空間よ、開け」

突然ナナシの目の前に黒い空間が空いた

そして、ナナシはその空間に向かい、ブルドーの取り出し作業を行

った

一方2人は…

「なっ！あれは確か…」

「！間違いない。あれは…古代魔法だ」

2人は突然空いた空間ではなく、それを行った人物に驚いていた

「どうした？取り出したぞ？」

「あ、ああ…これ、どうやって倒した？」

ジルは、ナナシの取り出したブルドーを見て、思った事を聞いた

「どうやって、か…あれは普通の人間には、出来ないし…おっ、あれで行くか…」

「どうやるって、そこに切り口があるだろ？」

ナナシは、捌いた切り口で倒した事にしたが…

「あのなブルドーは、こんな切り口じゃあ死なない。それに俺も解体をやってるんだ、これが倒した後に着けた位分かる…はあ言いたく無いなら良い。明日には、終わってるから取りに来な」

「気付いていたか…」

「助かる。じゃあ、また明日取りに来る」

そう言いナナシは外に向かった

「あいよー」

ジルは返事を返した後、ブルドーをよく調べた

調べていると…

「どうした？何か気になるのか？」

レヴィが聞いてきた

「ああ。…調べたらどうやって倒したか、やっと分かったぜ」

「どうゆう事だ？」

レヴィは、よく分からずジルに聞くと…

「見た時から気になってたんだ。ナナシはこの切り口と言ったが、これだけじゃあ、倒すには難しい。それに此処からはあまり血が出てない」

「そうか、生きていれば体内の血が流れている筈。だから出血の量が少ないのが怪しいと？」

「そうだ。首の辺りを見てみる」

「首の辺り…はっ！」

レヴィは首の辺りを調べるとある事に気付いた

「気付いたか？」

「いや、まさかそんな…あり得ない」

レヴィは自分の考えた事を否定したいが…

「いや、レヴィの思っている通りだ、他に致命傷となる傷も無い。それに、角にも人の手形がくつきりとある…これは間違いなく素手でブルドーの首の骨を折ったな」

ジルがレヴィの否定を丁寧の説明を加えて否定した

2人は黙り込み再びある一点を見た。2人の目には、ブルドーの首からほんの僅かだが、骨の破片が飛び出ているのが映っていた

「ナナシ」

「成る程…やはり人には出来ない事はやらない方が良いか」  
俺は背を壁に預けたまま言った

ナナシは外に出た時、ジルの行動が気になり闇で気配を消した後、盗み聞きをしていた

「さてと…今夜どうすっかなあ」

俺は壁から背を離し、空を見上げ呟いた

「うーん…」

「考えても仕方ねえし…取り敢えず何処かの屋根で寝るか」  
俺はそう結論し、7mはある屋根に軽々と飛び乗った

そう言えばこのベツツエルに来て初めての夜、か

ナナシはそう思いながら空を見上げた

「ほおー、綺麗だな」

夜空にはナナシを歓迎するかの様に星々が輝いていた

ガタガタ…

「何の音だ？」

俺は音が気になり、音の方向へ屋根をつたいながら向かって行った  
音を頼りに向かっていると…

「何だよ馬車か」

音の正体、馬車に辿り着いた

「来て損した…ん？待てよ」馬車にしてはでかくないか？…護衛の人数も多い様な…ちよいと調べて見るか

ナナシは馬車の中身が気になり、闇を纏い馬車に飛び乗った

ガタツ

「うん？」

護衛の1人が音に気付いたが…

「気のせい、か」

辺りに何も無い事を確認した後、再び歩き始めた

「ふう、あつぶねえ。それより荷物の中身は…ちっ、昔も今も変わらねえんだな…」

馬車の中には…

「奴隷、か」胸糞悪いぜ

色んな種族が鎖で繋がれていた

どうするか…別に今助けなくても良いんだが、これがもし貴族の所に運ばれるならその貴族の家の中にも居そうだしなあ…

「此処は様子見だな」

暫く馬車の上で待機していると…

「やはり、貴族の所に運ばれたか」

ナナシの予想が当たり、貴族の館に着いた

奴隷は昔よりも減ったみたいだが、まだあるんだな

俺がそんな事を思っていると、館の手前まで来ていた。すると…

館の扉が開き…鎧を着た護衛らしき奴らが2人と、丸々と太った男が此方に近づいてきた

「これはこれは、ブドリ伯爵何時もご利用頂き…」  
馬車を運転していた奴が喋っていたが…

「それは良い、早くそれをよこせ」  
ブドリ伯爵に遮られ、一方的に言われた

「分かりました。おい、此处へ連れてこい」

「へい」

馬車の奴は近くに居た奴に命令した

命令した数秒後…

「速く歩け！」

バシンッ！

「グッ！」

命令された奴は奴隷を鞭で叩きながら連れてきた  
ギリッ

「コイツら……」

「これが注文された奴隷達です」

馬車の奴はブドリ伯爵の前に奴隷達を並べた

「…宜しい。おい、金を渡してやれ」

ブドリ伯爵は奴隷達を見た後、護衛達に命令した

「はっ」

護衛は馬車の奴に近づき、少し大きめの小袋を渡した

「確かに受け取りました。では私達はこれで、失礼します」

「ああ」

取り敢えず降りる…

「その前にちよいと細工を…これで良し」

ナナシは馬車に細工をした後、馬車から降りた

「亜人の男は牢へ、女は体を洗わせた後、俺の寝室に連れてこい」  
ブドリ伯爵はそう言い、館の中へ入って行った

「はっ」

護衛達はその指示を受け、奴隷達を男は館の裏の方へ、女は館の中  
へと別々に連れて行った

亜人？今は良いか…それよりどっちを追いかけるか…「うーん…取  
り敢えず牢へ行って見るか」

ナナシは迷いながらも、牢へ行く事にした

追いかけていると…

「あれか？」

小さな小屋に辿り着いた

「おい、あれは準備してあるのか？」

奴隷を連れて来た奴が、小屋の隣に居る奴に話しかけた

「ああ、ちゃんと準備してあるぜ…どいつからだ？」

小屋の奴は、火の中から鉄の棒を取り出した

あの野郎、焼を入れるつもりなら…

「お前からだ」

許さねえ！

俺は一瞬で小屋の奴に近づき…

「火よ、燃え尽きろ」

頭を鷲掴み、掴んだ手から断末魔さえ出せない程の火力で焼き尽くした

「な、何だてめ…」

奴隷を連れて来た奴が剣を抜きながら言うが…

「黙ってる」

俺は剣を奪い、鎧と一緒に心臓を貫いた

その後、奴隷達に近づき…

「闇よ、拘束を解け」

闇で奴隷達に繋がっていた鎖、足枷、手錠を壊した

「大丈夫か？」

俺は奴隷達に話しかけると…

「あ、ああ。助かったよ、ありがとう」

耳が尖り、美形の…エルフから返事がきた

「なら良かった…取り敢えずこの中に入ってくれ」  
俺は空間を開いた

《！？》

奴隷達は突然現れた空間に驚き、困惑したが…

「大丈夫です、これは害がありません」

魔法に長けているエルフがそう言う…それぞれがナナシにお礼を  
言ってから空間に入って行った

「さてと…」

俺は空間を閉じ、小屋を開けると…

「成る程、地下へ繋がってるのか」

石の階段が下へと続いていた

取り敢えず降りるか…

俺はそう思いながら螺旋状の石階段を降りて行った

階段を降りきると…

ったく、こんなに集めたのかよ…

「こりゃ、ブドリって奴をボコらねえと気がすまねえな」

「あ？…てめえ誰だ？」

牢のすぐ側に座っていた奴が、振り返った

「うるせ…っ！」

俺は座っていた奴の机の上に置いてある物を見た瞬間殺気立ち、奴に一瞬で近づき…

「おい…それ、誰のだ？」

奴の首を右手で持ち上げながら聞いた

「何の、事、だ」

座っていた奴は苦しみながら、言った

「とぼけるんじゃない…」

ナナシが見た物は…

「これは誰の指かって、聞いてんだ」

大人の指より小さい親指が2本机の上に置いてあった

大体分かるがな…

「あれ、だ」

座っていた奴は、ある人物を指差した

その人物は…牙が少し生えた子供だった

やはりか…

「そうか…もつてめえには、用は無ねえ」  
ドスッ

ナナシは言葉と共に左腕で、座っていた奴の鎧と一緒に心臓を貫いた

「けっ…闇よ消せ」  
死んだ男を亜人を入れていた檻と共に闇の中へ消した

「取り敢えず…あの子供以外はこの中に入ってくれ」俺はそう言いながら空間を開いた

突然現れた空間や、俺の言葉に困惑していると…

「あいつをどうするつもりだ？」  
獣人の男がナナシに話し掛けた

「指を治すんだよ」

「そうか…じゃあ、あいつを頼めるか？」  
獣人は、少し考えた後ナナシに頼めるか聞くと…

「ああ、任せな」  
まっ、頼まれなくても治すがな

獣人は望み通りの答えが聞けると空間の中に入っていた

皆は獣人の男が入ったのを見ると次々に空間へと入っていった

#### 4 話（後書き）

読んで下りありがとうございます

## 5 話（前書き）

書き方を少し変えました。

読みやすくなっただけならば良いなと思います

## 5話

さて…

「治療の方法は…これか」

俺は記憶の中から有効な魔法を見つけ、机にあった指を拾い、子供の所へ向かった

「大丈夫か？」

うん？女の子か？

少女の所へ近づき話し掛けると…

「…貴方も私の指を切りに来たの？」

両手を隠し…怯えながら、予想外の言葉を言った

おいおい、いきなり指を切るって…

「違う、その逆だ。指を治すんだよ」

「…嘘じゃない？」

「ああ。だから両手を出してくれ」

「…分かった、はい」

暫く考えた後、両手を出してくれた

「ありがとう」

俺は魔方陣を構築し、少女の指を治した

「…本当に治してくれた」少女は指を見た後、小さく呟いた

「まあな…取り敢えずこの中で皆と待つててくれるか？」

俺は少女の呟きに軽く答え、空間を開いた

「貴方は何処に行くの？」俺の言葉に疑問を持ち、質問してきた

「ん？俺はちよいと此処の伯爵に用があつてな」

少し位ボコツとかないと、気が済まねえからな

「…私も行く」

突然黙つたと、思つたら付いてくると言い出した

何を言つてんだ？

「駄目に決まつてんだろ」

「どうして？」

「危険だからだ。それにあの腐った野郎でも相手は伯爵だ、伯爵の所へ行くには戦闘が少ないにしてもある。そこへお前は連れて行けない」

それでも行くなら…

「…それでも行く…私は貴方の傍に居たい」

はあ、此処まで言われたら仕方ねえか…

「死んでも後悔すんじゃないぞ？」

「うん」

少女は笑顔で即答した

まっ、死なせないけどな

ナナシはそう心の中で思いながら、少女と一緒に牢を出て屋敷へ向かった

さてと…屋敷の中に入ったのは良いが…

「全然分かんねえ」

大体此処は、何処ら辺だ？

「どうしたの？」

「いや、此処が…おっとー」ナナシが喋りながら進んでいると…

「あ？」

「誰だ？」

「侵入者か？」

「何だ？」

曲がり角から兵士らしき4人が出てきた

「たく、早速戦闘かよ…そうだ。コイツらに道を聞くとするか  
「お前は下がってろ」

「分かった」

「何だ？お前此処に…ソイツは確か牢に居た奴じゃねえか？」

最初挑発気味に喋り掛けてきたが、少女を見ると真剣な顔をして、  
聞いてきた

「そうだ」

俺は少女隠しながら言った「確認するが、外の奴等はどうした？」  
隊長は真剣な顔をし聞いてきた

「勿論倒したさ」

「ただ、言って信じるのか？」

「そうか…」

「ま、マジかよ」

「相手はAランク以上、か」

「隊長どうします？」

信じてるよ…それに外の奴等ってAランクだったんだな

「どうするも何も…殺るしかねえだろ！」

「そう言いながら、剣を抜き襲い掛かってきた」

それを見た部下達が次々と剣を抜き、向かってきた

殺生は、なるべく控えるか

「何考えてんだ！」

「おっと、いやー悪いな！」俺は隊長と呼ばれた男から剣を奪い…

「グフツ！」

腹を蹴り飛ばした

「此方も行くぜ？」俺は答えを聞く事無く、奪った剣で残りの3人の武器を壊し、動けない程の傷を付けた

少しやり過ぎたが…まっ、死にはしないだろ

「取り敢えず…おい、起きてんだろ？」

俺は蹴り飛ばした隊長に近付き道を聞こうとするが…

「…」

気絶のふりか…なら…

「起きろってんだ」

俺はシンクと同じ様に静電気より少し強いのを手に集め、腕を握った。すると…

「アガッ！！！」

腕を握った瞬間、隊長はあまりの痛さに声を上げ飛ぶ様に起きた

おっ、今度は違う反応。やっぱりこれは面白いな

「起きた様だな」

「クッ…」

「おっと、妙な真似はするなよ？」隊長がポケットに手をつ込む前に、剣を首筋に当て止めた

「何が狙いだ？」

負けたのが悔しいのか、止められたのが悔しいのかは分からないが、睨みながら言ってきた

「いやー、ちよいと此処の伯爵に様があつてな、だから場所を教え

て欲しいんだが？」

「断る…が、一様何故かを聞いても良いか？」

まあ良いか…

「ああ、簡単に言つと…伯爵をぶん殴るんだよ」

「は？…ぶつ、あつはつは。ぶん殴る、か。アンタなら出来るかもな？良いぜ案内してやる」

隊長は最初何を言ってるか分からなかったが、意味を理解し大笑いした

説明でも良いんだが…

「良いのか？」「ああ、ほら着いてこいよ」

「分かった…行こうぜ？」

俺は返事をした後、少女の所に戻り…

「うん」

一緒に隊長の後を着いて行つた

く隊長く

俺は目的を果たす為1年前からブドリ伯爵の護衛をしていた

そしてある夜にブドリの奴から呼び出された

「今から奴隷達が来る。お前は部下と一緒に館の周りを警戒しろ」

「はっ」

やっとだ。やっと待ち望んだ時が来た

そして、俺はブドリの部下と一緒に館の周りを警戒している時だった

「お？」

曲がり角を曲がると1人の青年が居た

此処は危ねえから隠れてると言いたい、ブドリの部下が居るしな…

「何だ？お前此処に…ソイツは確か牢に居た奴じゃねえか？」

俺は最初挑発をしたが、後ろに見覚えのある顔に驚いた

アイツは確か、外の奴等に指を切られた…待てよ、じゃあ外の奴等は…

「確認するが、外の奴等はどうした？」

「勿論倒したさ」

青年は涼しい顔でサラツと言った

「そうか…」

外に居る奴等がヘマをする訳は無いし…コイツならもしかしたら…

「ま、マジかよ」

「相手はAランク以上、か」

「隊長どうします？」

だが言葉だけじゃ信用は出来ん。少し試させて貰う

「どうするも何も…殺るしかねえだろ！」

俺は腰に付けていた剣を抜き斬りかかったが、青年が構えを取らない事に怒り…「何考えてんだ！」

怒鳴った…

だが…

「おっと、いやー悪いな！

もう少しで刃が届く所で青年は避け…

「グフツ！」

な、何が！？

隊長の目に映ったのは…

見込み違いは無さそうだな

ナナシの蹴り抜いた体勢が目に入った

ナナシは避けた時に隊長から剣を奪い鎧の胴体部分を蹴り、隊長を飛ばした

それにしても鎧を蹴り一発で使えない物にするとは、な

それから暫くブドリの部下が倒れるまで俺は観察していた

「取り敢えず…おい、起きてんだろ？」

いくら何でも早すぎだろ！部分の奴等は低くてもC以上だぞ  
「…」

俺はただ呆然としてしまった

それが悪かったのか分からないが…

「起きろってんだ」奴が声を発したと思った瞬間に、身体中に物凄

い痛みが走った

「アガッ!!」

俺はあまりの痛さに声を上げ飛び起きた

「起きた様だな」

「クッ…」

この野郎、少し痛め付け…

「おっと、妙な真似はするなよ?」

チツ…首に剣が当たってるがまあ良い、それよりも…

「何が狙いだ?」

俺を態々起こしたんだ、何かあるに違いない

「いやー、ちよいと此処の伯爵に様があつてな、だから場所を教えて欲しいんだが?」

仕返しが出来なかったし、コイツに教えるのはなあ…

「断る…が、一様何故かを聞いても良いか?」

取り敢えず何故かを聞いてみるか

「ああ、簡単に言つと…伯爵をぶん殴るんだよ」

奴は少し考えたと思つたら、変な事を言つた

「は?…ぶつ、あつはつは。ぶん殴る、か。アンタなら出来るかもな?良いぜ案内してやる」

俺は最初何を言つたか分からなかったが、意味を理解し大笑いした

「良いのか？」

奴は戸惑って居たが…

「ああ、ほら着いてこいよ」

俺が歩き出すと…

「分かった」

返事をし、少女と一緒に付いてきた

奴が何故、伯爵をぶん殴るかは分からないが…それはそれで好都合だな

## 5 話（後書き）

変えた書き方は、違う視点に心の中を入れてみました。

## 6話（前書き）

投稿が遅れてしまいました

## 6話

くナナシく

伯爵の所に向かっている間に名前を教えあつた。隊長はランド、少女はリンと言うらしい…

「…これで良いか？」

ヤバツ、考えてたから何を言つたか分からねえ…

「…私はそれで良い」

えっ！？知らないの俺だけ！うわー、聞きづらいけど…

「悪いけど、もう一回言ってくれるか？」

「聞いて無かつたのか？」

「ああ、すまん」

「はあ…」

悪かつたから、そんな目で見ないでくれ

「…まあ良い、もう一回説明するぞ？」

「頼む」

「ああ…伯爵の所に行くのは簡単だが、会うまでに1つ問題がある…」

畏とか色々あるんだと思っていたが、伯爵の所に行くのって簡単なのかよ。それに…

「問題？」

「ああ、その問題は…奴の側近だ」

側近、か…

「て事は強いって事で良いのか？」

「ああ、奴はあれでも伯爵。それなりの奴を雇ってる筈だ」

成る程ねえ…

「じゃあ、俺等の役割は？」

「俺とナナシで、側近を潰す」

「私は周りの警戒と、遠距離の援護」

「大体分かったが…リンは魔法を使えるのか？」

遠距離って言うてたけど、武器が無いとなると魔法位だよな？この年で魔法が扱えるとは思えないんだが…

「…」

何で俯く？…もしかして地雷踏んだ？

「多分、見た目からして使えると思うぞ」

何でアンタが答えるんだよ…それに見た目が子供だから扱えるとは思えないんだが…

「どうゆう事だ？」

何か知ってるのか？

「…リンは多分、吸血鬼だ」

「吸血鬼？」

地球では聞いた事があるんだが…この世界にそんな種族居たか？

「…少し違う」

今まで黙っていたリンが喋り始めた

「違う？」

どうゆう事？

俺は訳が分からず、ランドを見るが…

ランドも訳が分からないとゆう感じで首を傾げた

「私は…」

俺は再び喋り始めたリンを見た

「私は…吸血鬼のハーフ」

決心したような感じで、はっきりと答えたが、その後また俯いてしまった

「ハーフ？」

そんなに決心するような事なのか？

俺は再びランドを見る

「どうして俺を見る？」

「いやー、ハーフの何が駄目なのか分からなくてよ。説明頼む」

「お前本当に何も知らないんだな」

ランドは呆れたように言った

「無知で悪かったな」

「はあ、まあ良い。ハーフとは…この世で最も蔑まれる存在だ」

「蔑まれる？」

何で蔑まれるんだ？

「ああ…皆は混血とか、混ざりもんとか色々だ」

たった、それだけかよ、それだけの理由で…まさか…

「先に言つとくが、俺はそんなアホらしい考えはしてねえぞ？」

「なら良い…」

俺はランドに確認をしてからリンの方へ向かった

「…なあ、リン」

「…何？」

俯いていたリンが顔を上げたが…

「ランドから話しは聞いた」俺が無知じゃなかったら、態々聞く必要は無かったんだよねあ

「…そう」

言葉を聞いた瞬間にまた俯いてしまった

はあ…

「えっ？」

リンは訳が分からないと言う感じになった。その訳は…

「リン、よく聞けよ…俺とランドは少なくともリンの味方だ。それは覚えていてくれ」

俺が抱きしめる何て…らしくねえよなあ

ナナシは、俯くリンを軽く抱きしめ、頭を撫でながらリンに優しい声で聞かせた

「良い、の？私は…」

「それ以上言うな。俺は二度は言わないぞ？」  
あんな事が二度も言える訳も無いけどな

「あり、が、とう」

リンは泣きながら2人にお礼を言った

「ああ」

「おう」

それからリンが泣き止むまでナナシは頭を撫で続けた  
「もう、大丈夫」

「そうか…立てるか？」

俺はそう言いながら手を出す

「うん…ありがとう」

リンはナナシの手を掴んで、立ち上がりお礼を言った

「おう」

フラッ

リンの体勢が崩れ…

「おっと…ランド、リンと一緒に待っててくれるか？」 やっぱり  
もう少し休ませた方が良さな

…そうになる所をナナシが受け止めた

「俺は良いが…」

そう言いながらリンを見た

「私は大丈夫だから」

「無理はするな…ランド、リンを見張っててくれ」

「分かった…頑張れよ」

ランドは最後に真剣な表情で言ってきた

雇われてる奴の事なら心配無いっての…

「ああ、

リンを頼む」

「任せな」

俺はランドの言葉を聞き、ブドリが居る所へ向かった

ランドから聞いたブドリの場所まで暫く向かっている…

「本当に罠とか、何も無いんだな…おつ、あれか」

不思議に思いつつも歩いていると豪華な扉が目についた

いかにも居そうだよなあ

ペタペタッペタペタ…

複数の足音？

「兵士か？…だがこの足音は裸足の音だよな」

…様子を見に行くか

「闇よ、消せ」

俺は闇を纏って気配を消し、音の出所へと向かった

ペタペタッペタペタ…

近いな…この曲がり角の先か

俺は曲がり角から少し顔を出して、音の正体を確認すると…

「…女の奴隷が居るの忘れてた」

そこには兵士に囲まれ、手を縛られた状態で歩かされてる女の奴隷達がいた

「見たからには助けるか」

取り敢えず…

「空間よ、開け」

俺は奴隷の人達を空間の中に入れた

「何だ！？」

「どうなってる！？」

「随分と混乱してるねえ」まっ、いきなり人が消えれば当然か

曲がり角から出ながら喋ると…

「貴様何者だ！」

一斉に武器を構え、警戒した

「誰だって良いだろう？」兵士は…5人か

「答え…」

ドスッ！

「戦闘は始まってるぜ？」俺は一番手前に居た兵士を気絶させた

「野郎！」

兵士が倒れたのを見ると、残りの兵士達が斬りかかってきた

兵士が出て来るのは予想外だったな…

「まっ、片付いたし、本題に移るか」  
「そう言いナナシは豪華な扉へ向かった」

「気絶してる兵士を残して…」「此処か」  
中に居るのは…気配からして2人…

ナナシは豪華な扉の手前に止まり、探った

それと、扉に仕掛け…

「属性水の中級魔法、効力は束縛、解く方法は暗号入力、術式の破壊、か」

だる…

「面倒だ…風よ、裂け」

扉と仕掛けを風で切り刻み、破壊した

「…っ！」

雇われた奴は何も無い所からいきなり魔力の反応が出た為驚き…

「な、何だ!？」

ブドリは何が起こったのか分からず混乱していた

「どうも」

俺は闇の魔法を解き、軽い挨拶をすると…

ガキンッ

「おいおい、挨拶無しか？」雇われた奴は、俺の姿を確認すると風を纏い、凄いスピードを出しナイフで斬りかかってきたが…ナナシはちゃっかりと拝借した兵士の剣で攻撃を防いだ

「っち…」

舌打ちをしながらナナシから距離をとった

「き、貴様は何者だ!？」

うん?…あー、すっかり忘れてた

「何者に見える?」

俺的には…侵入者?

「ふざけおつて、殺れ!【風速の暗殺者】」

な、何だその名前?…いや、誰の事かは分かってるし、名前の通り風を使うのは分かるけど…

「ああ、分かってる」

そう言い風速は、武器を構えた

まあ良いか…

俺は武器を構えず自然体で相手の攻撃を待つが…

「どうした?」

「いや…」

そこで、言葉を区切り…

ガキンッ

「やはり、防ぐか」

普通の人には見えない程の速さで斬りかかってきた

「まあな」

全身に風を纏ってスピードを上げている様だが…遅い

「俺も行くぜ…風よ、纏え」俺は小声で呟き…

スッ

「俺の勝ちだ」

「何ッ!？」

風速の何倍もの速さで後ろに回り込み剣を首に近付けた

「どうやって…うつ」

ナナシは手に眠りの魔法を施し、その手を風速の顔に近付け眠らせた

聞こえてるか分からんが…「後で教えてやるよ」

こうゆう事から足を洗えばな

「よつと…待たせたな」

眠らせた風速を端に運び、振り返りながらブドリを見た「くっ…っは」

唇を噛みしめ悔しそうにするが、それもすぐに変わる。まるで良い事を思い付いたかの様に

「な、なあ取引をしないか？」

「取引？」

何考えてんだ？

「そう取引だ。お前が欲しい物を出そう、何が欲しいだ？金か？地

位か？それに俺が買った奴隷もやる。どうだ？」

どうしようもない屑だな、それで自分が助かるとでも思ってるのか…

「はぁ、無いな」

「ほ、他にも出す…」

まだ言ってるのか…

「黙れよ」

「へっ？」

「俺は、てめえからの物何て要らねえんだよ…覚悟しろ」  
喋りながらブドリに近付き、拳を握る

「ま、待て話せば…」

「話す事何か無えよ！」  
ドカッ

ブドリの口から齒を何本か出しながらぶっ飛び、壁にぶつかった所で…

シュッ…ドンッ

ナナシは持っていた剣を投げると…ブドリの襟に見事刺さり壁に張り付けた

「終わった、終わった…さてと、うん？」

ナナシはリン達の所へ行こうとした時一通の紙が降ってきた

「何だ？」

俺は降ってきた紙を掴んだ。内容が気になり広げると…

「…なるほど、契約書か」

そこには、奴隷を買ったとゆう証拠と他言無用とゆう内容が書かれていた。ブドリの署名と血印付きで

「うーん、シンクに渡すか」俺はそう結論を出し、紙を空間に入れて再びリン達の所へと向かった

「よう、終わったのか？」

「ああ」

ランドを見つけ近寄ると、先に声を掛けられた

「リンは？」

「そこで寝てる、多分不安だったんだろうよ」

不安か…

「そうか…よいしょ」

俺はランドに返事をしてからリンに近寄って背負う

「これからどうするんだ？」

「…さあ？」

俺はともかく問題はリンだよなあ

「さあってお前…行く所無いなら俺の家に来るか？」ランドは呆れ

ながらも誘ってくれた

「マジで!?!」

その話を聞きランドに詰め寄ると…

「あ、ああ、良いぞ。着いて来い」

俺の行動に顔をひきつらせたが、言葉は変わらず返事を返し、ランドは歩き出した

「おう、ありがとな」

俺はリンを背負いながらランドに着いて行った

## 6 話（後書き）

読んで下りありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0288x/>

---

俺の転生先は...

2012年1月14日21時50分発行